

岡本かの子全集未収録資料紹介（二）

岡本かの子全集（冬樹社・筑摩書房版）未収録の文献については、かつて「岡本かの子全集未収録資料紹介」（『大阪産業大学論集 人文科学編』一一六号、平十七・六）に掲載し、計三十六篇に増補のうえ内容を改稿して拙著『岡本かの子の小説（ひたごころ）の形象』（おうふう、平十七・九）に収録した。ここではその補遺となる十篇（随想八、小説一、広告文一）を、それぞれ発表順に紹介しておくこととする。

各篇の書誌事項等は、附記した解題を参照されたい。なお管見では、それらの掲載号は『犯罪公論』『輝夕』『セルパン』、そして『婦人と修養』各号と『我が家』二〇〇号以外、全国の図書館・文学館に所蔵されていない。またいずれの単行書にも全文が収録されたことはない。

原文の復刻にあたっては、旧漢字を新字体に改め、ルビは一部を除き省略した。「ゝ」など踊り字はそのまま記し、誤記等には「ママ」を付した。なお本文中には今日からみれば人権上不適切と思われる表現を用いた箇所もあるが、故人の作品であること、時代背景等を考慮し、原典通り記載した。

外村 彰

農村婦人におくる手紙

おみねさま。ことしは都にも雨がすこしも無いのですよ。

元日の午後にちら／＼とほんのすこし淡雪が降りましただけで、去年の十二月からひきつづいてのお天気つづきです。たださへ埃りばい東京が、風の立つ日などには何か粉でもあびせられるやうです。そちらの畑の土もさぞかはいて居ること
でせうね。畑には今、なにがあるでせう。稚い小松菜にねぶ
かの葱？。あなたの旦那様が素朴な野良着のまゝ、でよく枯ら
した下肥をかけて居られるのが眼に見えるやうです。細くた
んねんに筋をたてた、青物畑のうねうねに、黒藍色の絹
紐のやうに蒔き延べられたこやし、の枯れたにほひ。野に棲む
もの、つつましやかな、温和な、強健なもの、臭覚には、そ
れが香ばしくもなつかしくも感じられるであります。わた
しにはそれを信じていることが出来る記憶があります。

都会と田舎と両方に育つて、どちらにも故郷こきやうの感を持つわたしは、幸か不幸か都会に居る時は田舎にあこがれ、田舎に

居る時は都会の美点を遠望し得られます。それゆゑ、よく教
育者の人などが一がいにするやうに、都会を浮薄とし、田舎
ばかりを素朴として品隲ひんたうはしませんが、とにかく都会にはか
り人生の幸福があるやうに、もがきあせつて都会ばかりに集
まつて来る人は、それが田舎に棲む運命を無理にうち捨て、
来る人であればなほ、慾のふかいそして運命をこまやかに味
ふ人でないがさつの人のやうに思はれます。

さて、おみねさま。今宵は月の好い晩です。主人の居ない
私の広い家はまことに静かです。硝子戸の外の昼のやうな
月の光を私はひとりで眺めながら、私の家の茶の間に座つて
居ます。今まで私の傍で身の上ばなしをして居た年よりの女
中が、用をしまつて寝支度にかゝつて居るらしく女中部屋の
方でこそくと音をたて、居ます。

彼の女は、久しぶりでまた今夜いつもする身の上ばなしを
今しがたまで私のそばでくりかへしました。

東北の方の、小さい都会の近くの農村にこの女中は生れて
育ちました。許婚があつたのに——と彼女は悔くやむあまり
に、自分を叱るやうに話の最初にいつも斯ふ云ふのです。両
方とも家は貧しかつたのですが、梅の木のですばらしく大きい
のが両方とも背戸に古く続いた家の格式を見せて居た。と斯
う彼の女はすこし得意気にも云ふのです。手ぐりではあつた
が自分が糸とりがうまいばかりに——いえそれよりも、ほか
の娘達より自分が色白であつた為にかもしれません町の製絲

工場の若主人が無理に工場へ自分を買ひとつて行つた。別れ
を惜しむ許婚の男の無骨な留め立てが、彼女の自慢に逆上し
た出村でむらのころを引きとめることが出来ませんでした。男は
いとしくとも虚栄——なにか町に彼女のそれを満たして呉れ
るものが待つてでも居るやうに、遮二無二出かけて行きまし
た。町の入口の石橋の上まで来ると、今まで平氣をよそほつ
て居た若主人が彼女をふりむいてにやりと笑ひました。彼女
は何かいやな前兆まへぶれを感じたけれど、今さらどうすることも出
来なかつたのだそうです。

若主人の狡猾なもてあそびものとなり、そのあげく身も心
も疲れて居ながら、やはり苛酷な責苦の鞭にむちうたれる工
場の女工生活へ追ひやられた。許婚の男はその為一時氣も狂
ふばかり、それがなほるとしばらくはぼんやりとしたやくざ
ものになつたものゝ、親が嫁をもらつて氣を引き立ててやつ
た為、やがて幸福な農家の主人にたちかへつた。自分が二度
目の流産のからだを親の家へ辛うじて運んで行つた時、丁度
それは梅の花の盛りであつた。許婚の男は小さい赤兒あかこを抱い
た新妻と、その梅の樹の下で昔のとほりの野良着のまま立
ち話をして居た。濟まないと思ひ乍な口惜しくねたましく、
そのまゝ、実家へもどらず足を返して故郷を逃げ、あちこち
をさまよひ暮らし、とうとう東京まで流れて参り、ただ正直
なばかりが取柄でお宅へ御使の願へるやうにもなりました。
と申すのですよ。さう云へばこの老女中には正直が取柄で、

ほかには我まゝな勝手なところも、虚栄的なところもたくさんいまだに残つて居ます。私はそれがいけないとか憎いとか強いて思ひません。それどころか、その為にもまた可愛ゆい所や押し切つて行つたのもしささへあります。しかし、まつたく彼女が一生をあやまつたのはまたそれゆゑだといつづくおもひます。

今年も梅の盛が近づきまして御座いますね。と彼女は月夜の光をすかして庭の梅の樹の枝を眺めやうとします。もうよくよく思ひ出すのはおやめ、と私がなだめてやりますと老女中は物わかりよく、笑つてわたくしも故郷を出て少しは楽しい思ひもし働きのある夫も一度はもちました、何としても故郷の村の梅の樹としつとりとした藁ぶき屋根の家だけは忘れられません。と申すのです。わたしはその言葉のなかに、何としても若き農夫であつた最初の彼女の男、その許婚の男が忘られないのだと心ひそかにおもひやつて、彼女をあはれにおもひました。

夜もだいたい更けたやうです、月の光はますますくやはらかに冴えまざります。あなたの家の土間の天窓から、この光があなたの夜業の手元にあかるくさしては居ないでせうか。夜業にはこのごろおかいこ様のまぶしの俵をくゝる荒縄かどちらかをなすつてゐらつしやるのでせう。香の好い新藁の音がさらくくと聞えて来る様な気もちがします。二人のお子さん達は、昼間の野良遊びに疲れて可愛ゆく健康な寝顔を揃へて居

られるでせう？、あなたと旦那さんとがぼつりくくと話しながら、新藁のすれ合ふ音をさらくくとたてて静な夜の時間の流れに添つてまだ起きてゐらつしやるでせう。遠くで汽車の音はしませんか。追々どんな農村へも汽車の線路が這ひ寄ると聞きます。その汽車へあなたは乗らうとなさいますな。かたくななことを云ふやうですけれど、どうも私には農村で温和で静な暮しをして居る方達に汽車と関聯する幸福があらうとはおもはれません、汽車は汽車。あれは文化の片影をかたちどるものであるだけといふくらゐな、傍觀の心に落ち付いて居られ度くおもはれるのです。

しかしおみねさま。私がこんなにも平和を想像して居るあなたのまわりも時勢によつてこのごろあちこちの農村から聞えて来る農村問題——つまり、小作人と地主との問題、地主は地主で地税になやみを持つといふやうな世相の一部となつて居るのではないのですか。そしておびただしい婦人雑誌のはんぶんが、あなたの村の若い娘さん達をひたして都会の流行うらやましがらせ、青年達の心をはやらせるやうな思想がいつの間にか村へも侵入して、なにかとおだやかならぬ状態にあるのではないのですか。

実際、今時の婦人雑誌を見て心を動かさない地方の女の方はすくないやうですね。私のところなども、どれくらゐたくさんさんの地方婦人から上京してお宅に置いてもらい度いといふ手紙をうけとるかされません。それが大がいは婦人雑誌の愛

読者で、愛読者がかうして自分の境遇と誌面の色彩との混同をはかりたくなつたものです。一めんから云へば無理もありません。けれども落付きをもたない人のところがよく分つて、いやな気もちがいたします。その為、今の婦人雑誌があまりつけばしいと云ふひなんをうけてますが、雑誌をつくる人の方から云へば地方などで単調に暮らして居る人たちや、また都会でも忙しくして居る生活のひまを慰めやうと、あんなしげきの強い色彩や、頭をさうつかはなくても早い時間で早わかりするやうな、ぱつとした記事をのせるのではないでせうか。さうおもへば落ちついてそれをたのしむべきでありませうのに——。青年達についても意見があります。しかしそれは失礼ながらおみねさまにはすこし退屈な理くつになるでせうから、そしてこの手紙もあまりながくなりますから今宵はひとまづこの手紙をうち切ることにします。

このごろ歌をよむのはどうなさいました。あなたはよくどうせ私は尋常科しか出ないのでと云はれますね。それで結構です。歌は素直なところの現れですから、そのころをあらはすひらが、ただけでも結構です。日本の人間が出来るかと直ぐに始まつた、ほとんど日本の人間の呼吸にもひとしい歌にむづかしい理窟をつける必要はありません。それを学ぶとしても、今日ではほとんどひら仮名でむかしの好いうたが読めるやうになつて居ます。心がけてさへ居れば赤ちゃんに乳をふくませながらでも、夜業の後の茶をのみ乍ら、裏山の

風の音を聞いただけでも、心をこまやかに、丹念にもてば作れるのです。私の新年のうたをひとつおめにかけます。

若竹のさやぐを聞けばこの年の

はじめまる朝の風たちぬらし

解題……初出『我家』一四四号、昭和四・二・一一二頁。本文二段組、数詞を除き総ルビ。同誌は帝国在郷軍人会本部（東京市麴町区）発行。軍人や家庭に関する記事が多く、平山蘆江の小説「聯隊旗始末」等も掲載。書簡形式を借りた随想で、かの子の都会・田園生活についての意見がよく表わされている。

流行の洋装について

何と云つても流行の生れる所は巴里で御座います。でもその巴里がずっと昔のものや、ちよつと思ひもよらぬ世界のかくれた小国の風俗などからヒントを得て、いはゆる巴里の流行をつくるといふことは、向ふへ行つて——よほど注意深く見て居なければわかりません。英国では勿論、倫敦が流行をパリからとるので、マネキン嬢が飛行機でパリから飛んでも行きますが、英国人の気質は頑固で一般には直ぐに流行に動かされません。

この点から見ると日本は、流行を取入れることを非常に敏速に心がけて居るやうですね。しかし、日本の取入れた型が凡て巴里の流行かと言ひますと、それよりも私が途上で一般

に見かける婦人の洋服姿は、米国でもロスアンゼルス、日本婦人方に似て居るやうに思はれます。

前にも云つたやうに日本人は世界の他国の一般から見ても、

非常に進取的で器用であつて、流行を早く研究して取入れる事に就ては全く感心する場合がありますが、たゞ体格の相違が残念に思へます。西洋人と同じ体格であつたら手先の器用な日本婦人によつて、外国人に劣らない洋装美を現はし得ると思ひますが、和服が似合ふ体が必ずしも洋服に似合ふとは限りません。むしろ効果はその反対でせう。日本でも今日洋装の婦人が随分増加して来ましたね。洋服をおしやれや見栄に着て居ると思ふやうな、無理解な時代も過ぎ去つたのでせうね。洋服で身を軽くして力一ぱい女も働き度い時代となつたのですね。

が然し、たゞ問題となるのは、——日本人の体格もそれにつれて洋服風に改造されたらと、考へさせられる事です。

西洋では「顔よりも足」といふ位で、足をすぐ目につけます。足をがつちり揃へて活潑に歩くのは洋装の美の第一条件です。胸や腰の貧弱なものいけません。(足のことですが——もちろん大根式のはいけません、あまり金火箸のやうに細いのもいけません。良い加減にふつくり肉がついて、素直にのびて居るのが一番宜いのです。)

独逸に入りますと、巴里の流行をや、地味にとり入れて居ります。近頃非常にグリーン色の系統が流行でした。仏蘭西では同じグリーン色でも薄色で華美向ですが、独逸では同じ系統をゴク地味に使つて居ります。独逸婦人は凡て感じから言つて、実用的ですね。ニューヨークの金持の婦人などは仏蘭西へ着物を作りに行きますが、然し亜米利加婦人が着ると、仏蘭西婦人のやうなしつとりとした感じはなくなりますね。亜米利加では矢張り、ハリウッドあたりの婦人が、亜米利加特有のフラツパーな服を着たのが非常に面白いと思はれます。

(完)

解題……初出『婦人と子供』三三号、昭和七・五・一四五頁。本文三段組、数詞を除き総ルビ。四頁にはキャプシヨン「最近帰朝のかの子夫人」付記の肖像写真も掲出。滞欧体験に取材した随筆である。同誌は婦人と子供社(東京市日本橋)発行の婦人雑誌。同誌の全体像については未詳のため、今後も調査を続けたい。この号は四六倍判、四六頁でアート紙写真版が一二頁ある。同社との関わりが深いとみられる柏葉婦人会の催しや白木屋の広告が多数掲載され、服飾や行楽の記事も多い。今井邦子、吉井勇の短歌(各三首)や小川未明の童話「麗らかな街」も併収。

英・仏・独の子供氣質 欧州各国の子供に就て

○倫敦の赤ん坊

冬の倫敦では陰鬱な灰色の空から漏れる陽の光が宝石の様に貴い。薄陽の射す冬の日、倫敦の住宅街を歩くと、顔だけ出して全身を毛布で包んだ赤坊のはいつてゐる乳母車が家の玄関先に置き放してあるのを諸方で見うける。その時子供は皮の鞞で巧に乳母車に結へつけられて居る。すやすやと眠に落ちてゐるのもあれば、玩具を振り廻し乍ら独りで機嫌よく遊んでゐるのもある。ぼんやり往來の人や空を眺めて居る様なものもある。薄陽が射すといつても、厚い外套を通して寒さが浸みる冬の日である。赤坊を日光に浴させる利益よりも寒気にさらす危険が恐ろしく思はれる。

母親はその心配を笑つて打消す。

『大丈夫。産れると直ぐから冬も夏もあゝして外気に馴らされてゐるんですもの、仮令一日霧の中に置いとかれても病気になどなりません。自信の籠つた言葉である。自然はかういふ育児法を倫敦の母親に強制し、母親は実験による百パーセントの効果はこの様な言葉で表現する。』

イギリスの子供は赤坊の時から素晴らしい忍耐を強ひられる。母親は雨が降らない限り自ら定めた一定時間内は子供に乳母車の日光浴を課する。この間、赤坊は全くの孤独だ。どんなに泣いても時間が来る迄は母親に抱れることが出来ない

といふことを仕舞ひに悟つて仕舞ふらしい。乳母車の中で亡き叫んでゐる子供を見たことがない。

イギリスの子供は紳士の教育を授けられるそれは両親からだけでなく、社会の人達からも授けられる。

地下室の中で小学生二人が、向ふに坐つてゐる東洋の紳士を珍らしさうに眺めてゐたが、やつと何か自分の知識に符合する特徴を見出したと見えて、

「あの人支那人だよ」と一人が私語やいた。

「さう、支那人だねえ」と今一人が応へた。

二人の会話は近所の人達にも殆ど聞えない位な声だつた。

が、やがて一人の紳士——服装と態度でそれが教養ある紳士であることは直ぐ判つた——が子供達に近づいて私語いた

「あの方は日本人です。他人の批評をしては失礼ですよ。判りましたか」紳士は親切にやさしく忠告した。子供等は稍赤面して紳士の忠告に頷いて見せた。

中流以上の子供は子供同志の交際にも大人の交際の儀礼を適用する。隣の家の子供を訪問する時でもナアースを手に遣るか電話をかけるかして時間の都合を尋ねる。かういふ家庭の子供は邸の外では決して遊ばない。必ず自分の家の庭で遊ぶ。だから中流以上の家の庭には子供の為の運動機具が設備してある。

○フランスの子供

イギリスの子供は一種のスパルタ式方法で養育されるが、フランスの子供は温室式の養育をされる。従つてフランスの子供は繊弱な感じがする。フランス人は子供を制限する代りに産れた子供は大切に育てる。科学的な育児法などは無視して余り大切に過ぎる。イギリスでは子供が病気に罹ると直ぐ病院に入れて、親達は規定された面会日以外は決して会ひに行かないので癒りが早い。フランスの親達は病児を仲々手離さないで、折角入院させても手後れになる事が屢々ある。

パリパリの小学校の下級生は殆ど全部父親か母親に毎日送迎して貰つて居る。学校の門の前で親達は子供に別れのキツスを与へ、背中を二つ三つ軽くた、いて激励してから帰つて行く。子供は親が街角を曲るまで校門の前に立つて見送つてゐる。街角を曲る時親は必ず振り返つて手を振つて、も一度別れの挨拶をする。

放課時間近くなると校門の前は迎へに来た親で一ぱいになる。駆け出して来た子供に先づキツスを与へてから背負つてゐる荷物を外して親がそれをかゝへてやる。中には一寸したお菓子を持つて来て、御褒美をやる者もあるが、それは余りいい家庭のものではないらしい。

パリでは姉妹まへうだいの子供に同じ服装をさせることが流行してゐる。帽子、服、外套、靴、靴下等悉く色と形の同じものを着た姉妹が並んで歩いてゐるところは美しく、可愛らしいマフラ

ンス人は小さい子供を一種の装飾品のやうに取扱つてゐるやうに見える。

○独逸の子供

独逸の子供は野生そのものである。親達は子供の為に力を注ぐ余裕がない。従つて、遊び方も乱暴である。近頃ヨーロッパ各国の子供の間に野蛮人の酋長遊あそびが流行してゐるが、他の国の子供はたゞ羽毛はねの帽子をかぶつて駆け廻るだけであるが、独逸の子供はすつかり酋長の服装を整へて戦争の真似から、敵を縛ばつて殺す真似までする。かういふ殺伐な事までしないと面白くないらしい。

タキシードが停ると近所に遊んでゐた子供が駆け寄つて扉を開けて乗客からチップを貰はうとしたり、外国人と見ては活動に行く金をねだつたりする子供は独逸でしか見られなかつた。昨年のクリスマスクリスマスの前日或る菓子屋の前で二三人の子供が、「ボン／＼買つて呉れませんか」と通行人をとらへてはしきりにねだつてゐた。窮乏きふくの極にある独逸では子供までが精神的にも物質的にも饑うえてゐる。

解題……初出『三越』二二卷七号、昭和七・七・一 三五

（株）三越 広報室所蔵の資料による。本文三段組、数詞を除き総ルビ。「ゲーテ百年記念展」「珍客御機嫌（チャップリンジャケット）」といった記事や松岡譲「衣装は思想をもつか」等も併載。三六頁の二～三段目には岡本一平の挿

画「フランス巴里の小学校々門」も付載。同誌は日本橋三越発行のPR誌で、瀬崎圭二「三越刊行雑誌文芸作品目録—PR誌『時好』『三越』の中の〈文学〉—」（『同志社国文学』五一号、平十二・一）に詳しいが、同目録はかの子のものを含め、随筆類の記載を省いている。ちなみに今回の調査で、以下の文献の初出が判明した。

* 「欧州百貨店印象記」『大阪の三越』八年七号（三越大阪支店）、昭和七・七・一 一四—一六頁。『かの子抄』（不二屋書房、昭九・九）に再録された随筆。

巴里漫言

マルセイユから乗つて来た汽車が朝七時巴里のギヤル・ドリヨンに着く。巴里の朝は青年の筋肉のやうに澆刺としてゐる。まだ眠つてゐるであらうと想像してゐた巴里はとつくに眠から覚めてゐる。アパルトマンの窓はどれも開け放たれて室の掃除をしてゐる。新鮮な珈琲の香が鼻を衝く。朝の一時巴里の街は珈琲の香に包まれる。朝のキヤフエーにだけ使ふ特別大きな珈琲茶碗でキヤフエーを飲みながらクロワツソンを喰べる。これが巴里人に共通の朝食である。鳥打帽を曲げてかぶり、両手をズボンのポケットに突込んで流行唄を小声で唄ひながら気取つた足取りで労働者が仕事に出かけるところだ。彼の上衣のポケットから葡萄酒の壺が笑つてゐる。魚屋や八百屋の若い衆が大声を張り上げて客を呼んでゐる。

ギヤル・ドリヨンで拾つたタキシードは割栗石の舗道を撥ね反りながら走る。正確な間隔を置いてメーターの数字が廻転する。運転手は新来の客と見ればメーターがいゝ、加減廻転するまで迂廻する。そんなことを知らない人はいゝ、気持になつて、巴里の朝を味つてゐる。でも結局それでいゝのだ。運転手にシガー一本を稼がせる代りにその人はどうせこれから先滅多に見る機会のない巴里の朝を眺めることが出来たのだから……。

巴里はコスモポリタンの都だ。世界の隅々から寄り集つた毛色の違ふ、顔形の違ふ、そして言葉の違ふ人間が此処だけでは少しの引け目も感じないで生活出来る。停車場で汽車から降りた瞬間異国人は柔和な巴里に抱擁される。巴里はいつでも魅惑的な微笑を浮べてゐる。エトランゼエは容易にこの微笑の中に溶け込んで仕舞ふ。警戒も打算も意識しながら、それを忘れて仕舞ふほどいい気持になる。時々何かの拍子に——例へばまだ沢山あると思つてゐた紙幣が案外少なくなつてゐたやうな時——途方もなくいゝ、気持になつてゐる自分の人の好さを顧みて腹立たしくなる。「チエツ欺されてゐるんだな」と舌打しながら、小石を靴の先で力一ぱい蹴飛ばして見る。さうするとこの無生物に対する鬱晴らしだけで胸が軽くなる。巴里ではほんとうの巴里人はエトランゼエの蔭に隠れてゐて姿を見せない。だから路傍の小石が巴里人の代りに時

時エトランゼエのために復讐される。

巴里人は外国人をいゝ気持にして置いて金を絞る。かう云つて仕舞へば如何にも陰險な巴里を想像させるが、現実的に云へばさうなのだから仕方がない。たゞ絞られても後にいやな気持が残らないところに巴里のよさがある。

眞実の巴里人の姿を見なければ朝早く起きて地下鉄に乗つて見るがいゝ。各々の職場へ急ぐ生活の戦士の緊張した姿を見ることが出来る。エトランゼエが睡眠不足の眼を擦りながら起る頃には此等の戦士はもう彼等の視界には居ない。

巴里はどこへ行つても外国人が氾濫してゐるが、たゞ一箇所だけさうでないところがある。それはプラス・ド・バスチエユを中心とした労働者街である。恐らくこの辺にだつて伊太利人西班牙人波蘭人といった外国人が沢山居るに違ひないが、何故かさういふ外国人が一向目立たない。こゝ、いらだけはフランス人の殖民地のやうな気がする。プラス・ド・バスチエユと云へば今から百四十四年前仏蘭西大革命が起つた時封建制度の象徴として第一番に民衆のために破壊されたバスチエユの牢獄のあつた場所である。それは一七八九年七月十四日で、今でも七月十四日はフランスの国祭日となつてゐる。そのころ独逸のケーニツヒスベルクに居た老哲人カントさえバスチエユの陥落の報に接して、新しい社会制度の生

れようとしてゐることを予想して歓喜したといふ。それ程重大な歴史的意義を持つて居るこの場所がたとへ労働者街になつてゐようとも、それまで外国人に引き渡して仕舞ふことはフランス人にとつて忍び難いであらう。たゞフランス革命は巴里の第三階級（平民）が大部分完成したやうなものであつて見れば、この革命の発祥地を労働者の手に委ねて置いた方が寧ろ当然なのかも知れない。だが吾々はさういふ歴史的意義よりもつと違つた意味のことを考へて見度い。

巴里には二つの特異な社会的細胞がある。それはアパツシユとジゴロである。この二つはどちらも「不良青年」と簡単に片づけて仕舞へばそれまでだが、実際にはつきりした区別がある。

蒼白い瓦斯燈が裏街の壁に染を描いて流れてゐる街角に、レンブラントの夜番の様に一人の男が佇んでゐる。片一方の耳がかぶさるまで曲げてかぶつたハンチングの下から血色のいゝ片頬がのぞいてゐる。カラーの代りに首に巻きつけた色絹のハンカチが瓦斯燈の光に寂しく戦いてゐる。セーラーパンツがタンゴのステップに揺れてゐる。紙巻煙草を横にくわへた彼の唇からタンゴのメロデーが白い息を吐いてゐる。彼は遊び仲間か踊の相手を張つてゐるのだ。この頃のアパツシユは何と愛すべきユーモリスチックな存在ではないか。戦争前にはアパツシユは何かと云ふと直き血を流すことが好き

ある踊場は職業婦人の従順な騎士としてミスタンゲットに唄はれるアパツシユで一ぱいだ。

ジゴロは、本来は、女を働かせるか女の持つてゐる金を取り上げて、遊び暮す男のことを云ふのであるが、これも近頃になつてその特色が變つて来たやうである。そして今は一種の職業になつて仕舞つた。

外国人の多く集まる上流の踊場にはその踊場専属のジゴロが居る。革命に逐はれ、巴里に来て生活してゐる多くのロシヤ人の中でジゴロとなつてゐる者が可成りある。そしてロシヤ人のジゴロは一番高級だといふ。何故かといふに、どうせ彼等は帝政華やかなりし時代にはダンスに音楽に賭博にさう云つた遊びごとはフランスに流れ来る前に既にフランス風に通じ訓練されたブルジョアであつたからである。美貌で上品で機智に富んで居て婦人を嬉しがらせる術は何でも知つて居る。伊太利人のジゴロは踊は上手だが時に酷く性の悪い者が居る。フランス人のジゴロでは高級なのは割合に少い。これも矢張モンマルトルやモンパルナス辺の裏街の下層階級のジゴロがフランス的な気がする。ダミヤの唄ふ「セ・モン・ジゴロ」はさう云ふ裏街の貧しい娘を愛するジゴロを唄つたものだ。

パリの一流のカフェで職業的踊り相手として働いて居る若者——勿論それは一流のジゴロなのだ——で、年に十萬法(八

だつたが、この頃の彼等は少し許りの酒と少し許りの賭と少し許りの踊とより他には何の欲望も持たない。アパツシユの心境を變化させたものは確に戦争もその一つだ。殺伐な行為に心底飽きた彼等が耽美的に變つて行つたことは容易に想像がつく。だがも一つ彼等を変化させたものはミスタンゲットだつた。駝鳥の脚の様に乾枯びた脚は絹靴下で誤麻化せても、腰の弾力の不足はステップを踏む毎にどうにも誤麻化せない老ミスタンゲットは今でも愛嬌のあるしやがれた声でカジノ・ド・パリの舞台でアパツシユの唄を唱つてゐる。彼女はもう七十に近い。彼女が年若く、美しく、弾力に富んでゐた頃のアパツシユは乱暴そのものだつた。だのに彼女は其頃からさういふアパツシユを小粋な羊の様に温順なしい若者にしてムーランルージュの舞台で唄ひ続けてゐた。二十貫もある羽毛の冠を頭に載せて平気で舞台を跳ね廻つてゐた精力的な彼女にして見れば、女のことから割栗石に頭をたゝきつけて喧嘩する位なアパツシユでも、尻にぶらさげた駝鳥の羽位にしか思はなかつたであらう。半世紀近くもの間舞台の上で彼女に愛撫され、子供扱ひにされたアパツシユはどうとう本当に彼女の唄ふ通りに可憐なものになつて仕舞つた。

近代的なアパツシユを見たければプラス・ド・バスチエウの裏に在るリュウ・ド・ラツプあたりへ行くがよい。それもキヤトルズジュイエ(七月十四日の共和記念祭)とかノエル(降誕祭)の夜なら尚いゝ。此辺の小さな裏街に軒を並べて

万円位)の収入のある者が三十人位居る。金持の女は一才一辺踊り相手となつただけの一番美貌のジゴロに五百法払つたりする。かういふジゴロの最高記録は南米の一婦人が巴里のタンゴの解説を一度して貰つたのに対して一万五千法払つたことである。

普通のジゴロはカジノやレストランに出入して、客の踊相手となつて心付を稼いでゐる。それでも巴里警視庁の報告によるとかういふ普通のジゴロでも一晚に七十法乃至二百法のチップを稼ぐといふ話である。アメリカの金持の女などは巴里に滞在してゐる間だけジゴロを抱へる。これは随分危険なことでもあるがさういふ危険を取ることが一種の猟奇的な悦びを与へるらしい。それにはさういふ遊び人は巴里のあらゆる享楽機関に精通してゐる者なのだから、相手を面白く遊ばすことは手に入つたものだ。一二の怪しげな巴里の新聞にはジゴロ紹介所の広告が出てゐる。だがそんなのは絶対に信用出来ない。どんなに確な筋から紹介された者でもジゴロには決して財布を渡してはならぬ。

あるアメリカの女がロンシヤンの競馬場で一人の上品な紳士と知り合ひになつた。彼女は巴里滞在中その男を自分の介添人にするに決めた。男は女のダイヤの首飾をしきりに賞めた上旬、自分は今彼女の持つてゐるものにほんの僅か足せばそれよりも二倍も大きいダイヤを買ふ穴を知つてゐると語つた。その大きなダイヤはロシヤの亡命貴族の持物だと云

ふ。

それから一週間許り経たある日男は彼女のホテルに予ての美しい大きなダイヤを持つて来て見せた。彼はそれと彼女のものを評価させるため一緒に大きな宝石商まで行かうではないかと誘つた。宝石商の鑑定の結果は両方とも立派なものと判つた。女はこの大きなダイヤが自分の持つて居るものになし足したゞけで自分のものになると考へて無中になつて喜んだ。男は彼女から宝石と金とを受取つて云つた。「一寸友人に電話でさう云つてやりますから。」彼は電話をかける為、室の外へ出て行つた。そしてそれ切り帰つて来なかつた。勿論彼の持つて来た大きなダイヤもまだ彼が持つたまゝだつた。

解題……初出『犯罪公論』三卷三号、昭和八・三・一 四二―四五頁。本文二段組、数詞を除き総ルビ。「文化公論随筆」欄。同誌は文化公論社発行。田中直一(直樹)が経営・編集したいわゆるエログロ雑誌のひとつとして知られ、この号にも児童虐待や学生野球のスクヤンダル、怪異や犯罪などの記事が目立つ。小説でも橋本英吉「移り変り」、岩藤雪夫「飢ゑ」等、特異な題材が描かれている。かの子の随筆もこうした誌面を意識してパリ風俗の裏事情を記したのである。

燈火管制の夜の所感

ゴンドラで有名な水の都伊太利はヴェニスに、サンタ・マ

ルコの寺院といふ美しいお寺がある。お寺の直ぐ前はサンタ・マルコの広場と云つて、石畳の広い広場で、鳩が群れてゐる。その石畳の一ヶ所にお寺の門から僅か六七間と記憶するが、一枚の銅板が嵌めてあつて、それに「一九一八年×月×日オーストリアの飛行機此の処に爆弾を投ず」と記してある。

私はこれを見て、戦慄を感じずには居られなかつた。戦争となれば、こんなに美しい建物も敵に狙はれるのかと思ふと、何も恩怨のないオーストリアに義憤を感じた。この時は僅か六七間狙ひが外れた、め、サンタ・マルコの美しいお寺は難を免れたのであつたが、フランスのランスといふ町にあるお寺は、ドイツ軍のため砲撃され、その一部分が壊されて仕舞つた。このランスの寺院はゴシック式建築の精粹で、建築学上から云へば世界の至宝である。それ程貴重なものまで戦争となれば容赦されないのだから堪らない。

サンタ・マルコ寺院の場合は幸に爆弾が外れた、め無事だつた。私はその時一寸奇異に感じた。六七間位の処に落ちれば、柱の一本位は折れさうに思つて、よく注意して見たが、さういふ形跡は一つもなかつた。私はロンドンでよく空襲の経験について人から聞かされたが、大抵六七階の建物の地下室に居れば、上から爆弾が落ちても安全だつたと云ふ。それよりも敵機を砲撃する高射砲の破片の方が危険が多かつたといふ。兎に角空襲のある度に、街の人は近所の地下鉄にもぐり込んだといふ。そんな話も戦争が済んで十年も経つ間に、

当時の恐怖は実感を捨て、興味的なものとなつて仕舞つてゐるので、聞く方でも大したことはない位に思ひ込んで仕舞ひ勝ちだつたが、このサンタ・マルコの場合を見て、實際爆弾などそんなに恐ろしいものでもなさうに思へた。ところがそれは西洋に居ての感想で、日本へ歸つて、それを日本に当て嵌めて考へると、さう呑気に考へては居られない。少し風が吹けば揺れるやうな木造家屋であつて見れば、六七間どころか二十間位の距離へ落ちても、相当の被害はあるだらう。殊に焼夷弾などに遇つたら、それこそ薪の上に焰を落すやうなものであることは容易に想像される。

今年の八月初旬関東一帯の防空演習が行はれるといふので、演習当日より何日か前から、新聞やラヂオで空襲や防空に関する記事や講演が盛んに見聞された。若し東京が空襲に遭つた場合に就いての専門家の話を聞いてみると、まだ一度も遭つたことのない東京の空襲の話の方が、既に幾度か空襲に遭つたロンドンの話よりも、何倍か多くの実感を以つて私達の胸を衝いた。私は日本の国土が敵機に犯されることのないことを祈り、万一敵機が日本の上空に襲来しても、我が勇敢なる帝国軍人によつて、撃退されることを期するものではあるけれども、若し不幸にして敵機が帝都の上空に飛来した場合には、婦人の立場から国民としての義務を尽すだけの覚悟を持つて居なければならぬと思つた。私はさういふ考へから、今度の防空演習には、自分も演習員の一人であるとい

ふ氣持を密かに抱いてゐた。

愈々八月九日がやつて来た。朝から何となく皆緊張した顔つきをしてゐる。飛行機の爆音がする度に、あれは敵機かしら、味方かしらと、演習とは思へない程の不安を抱きながら空を見護る。こんな具合に九日の昼間は、大半空許りを見てゐるうちに暮れて、夜になった。九時半頃愈々サイレンが鳴つて非常管制に入つた。私の家も正規の手段を講じてから、皆で洋館のルーフ・ガーデンに上つて敵機の襲来を待つた。辺を見て見ると、全く規則正しく燈火管制を實行してゐる。近所どの家も皆黒く闇に包まれてゐる。ところが何といふことか、たつた一軒電燈に覆もしないで、窓を開け放してゐる家があるではないか。而もその家は数千坪の大邸宅である。防護団の人が「あかりを消して下さい」とメガホンで怒鳴つてゐるのが聞えないのか平氣である。折角皆が真剣な氣持であるのに、たつた一軒の家のために皆の氣持が乱されることを私は怖れた。「燈火を消して下さい」私は思はず斯う叫んで仕舞つた。恐らくこのやうな家は他には殆どなかつたであらう。若し実戦であつたらどうであらう。矢張平氣で燈火をつけて、窓を開けて置くだけの勇氣があるであらうか。

十日の夜、私は家族と一緒に防空演習風景を見に丸の内から銀座を一廻りした。それはたゞ見物して廻るためではなくて、空襲が主として行はれる下町では、どんな具合に演習が行はれてゐるのかを知りたかつたからである。車が銀座に差

しか、つた時、サイレンが鳴つて非常管制が布かれた。一瞬にして銀座は完全に暗黒の世界と化し去つた。その行届いた統制は実に美事なものだつた。これではなくてはならないと私は思つた。

宮城前の広場には数門の高射砲が据えられて、射撃の姿勢をとつてゐた。その附近には数千の群集が高射砲の活動を期待しながら待ち受けてゐた。これ等の人達の氣持は私には充分に理解出来た。演習であるからたとへ敵機がやつて来ても、実弾が飛び出して行く筈はないのだが、これ等の人達は高射砲の操作を見て、実戦に際してのその威力を想像して見度い慾望で一ぱいだつたに違ひない。

今度の演習を見て私に一番深い感銘を与へたものは、東京市民の団結した姿であつた。あのやうに一致した氣持で祖国日本を守つたならば、敵機の襲来もさして恐るゝに足りないであらう。

然し翻つて考へるに、精神的団結によつて積極的防禦は充分であるとしても、空襲の惨禍を出来るだけ少くする消極的防禦の点に至つては、帝都を初め日本の都市は誠に心元ない。ロンドン市民は地下鉄にもぐり込んだが、東京の地下鉄はロンドンのやうに深くない。地下室を持つビルディングは下町にしかない。而も現在では爆弾も十数年前よりは余程威力を増してゐるといふ。毒瓦斯もさうであるといふ。たとへ漸進的にしるそれらの防衛に対する予測が無くてはならない。私

はふと思ひ出した、戦時にあつて多くの都会人を避難せしめたとはいふ諸外国の堅実なる農民達を。諸外国中に在ても殊にフランス農民は尊敬に値する。彼等は決して徒らに都会に憧れない。己の分を知り、己の稼業を楽しみ、農村そのものを楽土とする心掛けに重く、都会は都会として客観視して居る。いはゆる腰が農村に安定して居るのだ。都会はそれらの地方人を頼母しき「殿」と考へ、平常に於ては安んじて国家の先端を司つて居るのである。最後に亡びんとして亡びる分担的生活が堅実な国家系体を成して居る。国家精神に於て何れの国にも劣らぬ我が国が、この系体形式を学ぶ所に益々国家の安定が確立するものと、所感はいと深いのであつた。

解題……初出『我家』二〇〇号、昭和八・十・一 一六

一八頁。跡見学園女子大学短期大学部図書館所蔵の資料による。本文三段組、数詞を除き総ルビ。写真版に「写真は毒ガス弾投下の後へ石灰を撒きつゝある処。(関東防空演習所見)」とのキャプション。杉浦翠子の短歌「杳掛にて」、岡本一平の漫画「為二百号」等も掲載。この随想は、すでに入谷清久『岡本かの子 資料にみる愛と炎の生涯』(多摩川新聞社、平十・五)に紹介されているが、「昭和八年八月、関東一帯の防空演習が行なわれたとき、十数年前の欧州大戦における空襲について、滞欧中各地で見聞した話を挿入しての所感」と解説されたのみで、本文は収録されていない。

一九三四年に對して

来年に対する希望を述べよと云はれる。希望とは自己の要
求的感情の一定制限である私は世上の何物に對しても否定の
感情を持たない。従つて肯定の絶対線を引かない。それで居
て主観的には好悪、取捨が、潔癖であり過ぎる。しかし私は
主観は主観私情は私情として内存して置き得る。殊に近來は
そうだ。私は他人や、他の情勢を他人や他の情勢に善悪好悪
の言明をしたことが無い。その習性がやがて自分の内部にも
二様のコースをつくらせたのであらうと思ふ。たとえ自分に
好悪取捨の感情が湧いてもそれで外界の対照を限定して仕舞
はない今一方の私のコースを振り返る。

斯う云つても私は消極的なのでは無い。希望は無いと云ふ
のではない。只段上段に振りかざしてこれが希望だと一概に
云ひ得ぬといふ迄である。

凡そ世上の現象は必ずリズムミカルに生じて来る。今年欠け
たものが来年に満ち、来年希望して得られなければやがてそ
の次の時期に於て充填されるであらう。遂に充たされ得ずば
それは遂に現世に自己に与られざるべきものと諦める。こ
の諦念を消極的なものと断じられ度くない。私は宇宙の自然
と共に運行する自己の生命の落付きであると断言する。

さて以上は私の抽象論である。この抽象の上に浮ぶ私の心
の具象的なもの——と云つてそれは一々取り出せない。結局

は前年と後年の中間に存在する来年の社会状況が一番本質的に要求するもの、そして一番それに適合する条件なり現象なりが本質的に確立すること繁栄すること——手近な例で云へば長谷川時雨女史やその周囲の女性方の目論まれた女性の劇の仕事などが本質を持つて社会の必要とされること等がこの漠然とした私の希望心理の圏内の具象として示し得るものであるう。

解題……初出『輝ク』一年一号、昭和九・一・十七 一面。

本文ルビなし。同紙は『女人芸術』の後継紙（パンフレット）で、女人芸術社内、輝ク会の機関紙。長谷川ヤス（時雨）が「発行兼印刷者・編輯人」であった。詳細は尾形明子『輝ク』の時代 長谷川時雨とその周辺』（ドメス出版、平五・九）を参照されたい。不二出版による復刻版がある。ちくま文庫版全集に五篇が収載されたものの、「一九三四年に対して」のほか、以下の四篇は編纂時に除外された。

* 「仏教要摘——岡本かの子氏談話より——」三年一号、昭和十・一・十七 二面。

* 「私信的な」三年三号、昭和十・三・十七 四面。

* 「清風——諸家断墨——」三年八号、昭和十・八・十七 四面。

* 「わが将士を想ふ言葉」五年一〇号、昭和十二・十・十七 一面。

これらは今回、紙幅の都合で割愛した。「清風——諸家断墨——」

は長谷川時雨の随筆集『草魚』（サイレン社、昭十・六）の献本に対する礼状。このほか、初出の判明した随筆に

* 「噴水」五年七号、昭和十二・七・十七 二面。『女の

立場』（竹村書房、昭十二・十二）に再録。

がある。なお拙著『岡本かの子の小説（ひたごころ）の形象』への、渡邊澄子氏の書評（『昭和文学研究』五二集、平十八・三）には『輝ク』への言及が多いが、「見逃した言辞」との指摘を受けた「わが将士を想ふ言葉」は、すでに永畑道子『輝ク』変貌と、真相』（『おんな撩乱——恋と革命の歴史』藤原書店、平五・十二）に引用され、前掲『岡本かの子 資料にみる愛と炎の生涯』にも本文の前半三分の二が掲出されていた。拙著でも註（二三九頁）で引いてある。ただし『輝ク』については指摘の通り「岡本かの子読書・言及年表稿」で詳しい記述を怠った憾みがあった。総じて示唆に富む評言を書かれた渡邊氏には、あらためて謝意を申し述べたい。

彼の結婚

藤倉芳雄といふ私の従弟が結婚したといふ噂を聞いた。彼は有名なモダンボーイだ。彼様な男は何ういふ女と結婚するかしら、彼は自分自身がお洒落であると同様彼の女性に対する選択も難かしいだらうと想像するのは私ばかりでは無い。

「——花嫁さんは横山富子つてあの女社長で有名な方のお嬢

さんのよ」

親類中で一番噂の原因を突き留めたりするのに飛躍的な才を持つ登茂子嬢が十九歳の好奇心を一ぱい頬に孕ませて報告の言葉を方々へ播いて歩いた。

その報告はしかし、私の処へ来る迄は、可成りの奏功に役立つたが、私はむしろその報告を啞然と聞いた。そのお嬢さんをお嬢さんに知つて居たからだつた。私が啞然とした理由は生憎そのお嬢さんに私はむしろ醜悪な印象を持たせられて居たからであつた。たとへ普通の令嬢としても藤倉芳雄の贅沢をもつて選ぶ女性として、私達はいくらか飽き足りなく思ふであらうのに、藤倉が現実を選んでといふ報せをうけたその令嬢——つまり〇〇会社の女社長横山富子女史の一人娘英子が芳雄の妻として想像を強ひられたとて、いよいよとなる迄私がそれを信じ得なかつたのも無理はあるまい。

英子は眼の赤く濁つた娘——社長として辣腕な富子の貪慾が娘の眼に象徴されたのかと私は先づそれが不快だつた。英子の赤く濁つた眼はその輪廓が大きいだけ不快な場面が広いわけだつた。その不快が顔全体に敷衍して顔の何処もかしこも堅く筋張つて硬化して見えた。殊にその眼の傍にあるほろが怪鳥の嘴のやうな憎々しい黒点を点出させて居た。嫌な娘！ それになまじウエーブの短髪を額に垂たしたのもむさくろしく感じた。二年前この印象を私に残して或る避暑地で深くも交際はしなかつた者同志が、別れてから、今度計らずも

私の従弟の而も一族切つての美男モダンボーイの妻として私の前に現はれるのだ。芳雄は或は富者の利に強ひられて不純な取引観念でもその結婚の動機に交ぜたのではないかと迄ひそかに私は芳雄の心事をさへ疑うたつて居た。然し表面は他の一族の信ずる如く何処迄も純な青年子女同志の恋愛結婚を信じる様子を装つて居た。

「——お姉様、とても綺麗なモダンなお嫁さんよ」

斯う云つて客に出る前の仕度をして居る私へ注進に来た妹。二階へ、セイセイ息を切らして上つて来た妹はこれも一族で有名な無邪気な毒舌家であるのに、英子を一目見て昇つて来てのこの讃辞は？

嘘では無かつた、英子はまるで変つて居た。英子の眼が今は決して赤く濁つてなど居ないのだ。綺麗に澄んで何か燦めく高貴な感じさへ湛へて居るのだ。不思議。眼が冴えればそして美しくなれば斯うまで顔の他の部分の情勢まで変るものか。赤く濁つた眼の感じに働きかけられて堅く硬ばつて見えな英子の顔の凡ての線は反対に冴えて美しい眼の感じに和らげられ統率されて均整を示し、あの眼の傍に邪魔物のやうに点出されて居た大きなほくろまでが、英子の顔の近代美を保証して居るやうに顔を華やかにする存在となつて居る。

「婦人の美は眼を基調とする」

この標語に就いて私は実に適確な証拠を見せられたわけだ。

「——あの時お目にかゝつた折あなたはお眼を悪くしていらつしやいましたね」

私は驚きをかくしてそれとなく英子に聞いて見た。

「——わたくし逆せ性のぼなのでうつつちやつておくと直ぐ眼が赤く濁ります。母がいろいろ案じました末スマイルを射すことを知りましたの。これさへいつも用ひて居れば私の眼は見違へる程いつも澄んで居ります。御入用でしたら私いつでも差し上げますわ。今も斯うしてハンドバックに入れて持つて居りますの」

英子は見栄を云ふでもなく私の疑惑を晴らして呉れた。

そして馴れた手付きでその時一滴を難なく自分の眼に射して私に見せて呉れた。

解題……初出『ホーム・ライン』三巻一〇号、昭和十一・

八・十五 二四〜二五頁。「掌篇小説」との角書あり。四百字詰原稿用紙に換算して約五枚の分量。本文四段組、パララビ。丹羽文雄の随筆「モデル供養」、宇野千代の短編「明日の晩」等も併載(目次なし)。同誌はホーム・ライン社発行で、映画・行楽記事やグラビアが多い娯楽雑誌。当初は、目薬のスマイルなどを扱っていた玉置合名会社のPR誌として発行されていた。詳細は関井光男「近代都市モダニズムの趣味雑誌『ホーム・ライン』」(『国文学』三三三巻一〇号、昭六十三・八)を参照されたい(「彼の結婚」は題のみ記載)。目薬の効用が主題に関わっている点は、スポンサーである同社の販売

戦略への配慮と考えられ、一種の広告小説とみなされる。

春を待ちつゝ、

寒波

今年の冬は特別に寒さが酷しいやうだ。正月匆々のある朝の如きは零下七度で、十六年振りの寒さだと新聞は報じた。

私の家の庭は南が展けてあるので、冬でも晴れた日は一日中陽がよく当り、こゝ数年間冬でも霜柱の立つた例れいがなかつた。それが今年の冬は度々霜柱が立つた。去年の秋蒔いたスギトピーや花葵などの苗が、暮のうちの暖かさせに勢よく伸びて、スギトピーなどはもう一尺位にもなつてゐたのに、新聞の所謂十六年振りの寒さの朝には、酷ひ霜のため葉茎が青黝せくなつて萎れてゐるのを私は発見した。私は吃驚して、早速家の者の手を籍りて竹と筵で霜除けを造つてやつたが、果して春になつて順調に育つかどうか気が懸りである。

この寒さは、遠くシベリヤから空中の上層を伝つて来た冷い空気が、晴天続きで空中に水蒸気の稀薄なものに乗じて夜中に降りて来るためださうだ。昔はこんな事実を誰も知らなかつたが、今日では気象学の発達によつてこんな事まで私達にも判る様になつた。日本海を距てたシベリヤの寒さが、かうも容易に日本に影響するのと思へば、何かしら慄然たるものがある。何かの雑誌で、日本海は最早大海ではなく、湖の狭さに過ぎなくなつたといふ意味のことを、ある海軍士官

が記されてゐたのを読んだが、それは飛行機や潜水艦の発達した今日、攻防何れの点からも距離を狭め、呼応を容易ならしめて日本海は既に海洋としての意義を失つたとの意味であつたと私は記憶してゐる。

近年成層圏飛行が世界の各国で盛んに研究されてゐるといふ話であるが、若し成層圏の飛行が可能になれば、そこは空気の抵抗が非常に少いので、遠距離の飛行が非常に短時間で出来る。そしてその結果は飛行機の攻撃性能を非常に大きくする。私はシベリヤの寒波の渡来する話を聞いて、ふと成層圏飛行を聯想して何か不安な気がしたのであつた。しかもこれはまだ現実の問題とはなつてゐないのだから心配はないとして、近代科学の発達が日本海を湖水と化したといふ事實は、女性の私達も認識して、それに対処する心構へだけは平素から養つて置かねばならないと思ふ。

電車

円タクといふ便利なものが出来てから、私は暫く電車といふものを忘れてゐた。どこへ行くにも円タクで行くといふことは贅沢には違ひないが、急ぐ時とか、雨の日とか、荷物の多い場合とか、不案内の土地へ行く時とかには円タクに乗る方が確に便利である。けれども一寸銀座へ散歩に行くにも円タクに乗るのは贅沢である。私は此頃になつてやつとそんな事を考へるやうになつたのが、寧ろ恥しい。それは今まで贅

沢に馴れて、贅沢を贅沢とも思はなくなつてゐたため、それを反省する機会を持たなかつたからである。

今度の事変は私達の生活にいろいろな反省の機会を与へて呉れた。私が円タクの濫用に気がつき、出来るだけ電車を利用するやうになつたのも、些細ながら事変のお蔭である。

さて電車に乗りつけて見ると、それはそれで仲々いゝところがある。第一に一定の軌道を走るのであるから安全である。そして動揺が少いので混んでゐない時にはゆつくり書物も読めるし、私のやうに平常書齋に籠り勝ちな者には街々の様子がとても珍らしく眺められて楽しくもある。

しかし、私のこんな電車観は朝夕のラッシュアワーの混雑を知らない人の言草として笑はれるかも知れない。そんな時刻に滅多に外出しない私には、朝夕の混雑はとても想像のつかない程酷いものらしい。私は外国にゐた時ラッシュアワーの混雑は経験したが、どこでも大都會では朝夕のひと時に沢山の人が動くのだから混雑することも亦同じらしい。この時間には殊に混み合ひのひどい線などを調査して車の運転を余計にふやしたら如何であらう。

また慾を云へば私はもつと電車の構造を乗心地よくして欲しい。もつと窓や腰掛を低くして、車室の中を明るくすると同時に窓外の眺望を広く採つて貰ひ度いそれから東京のやうな坂の多い市街には無理な注文かも知れないが、ロンドンにあるやうな二階つきの電車があつたらとも思ふ。

春を待つ心

冬も終りに近づくと頻りに春が待たれる。陽差しも次第に温くなり、木の芽も日一日と膨らみを増し、人間の気持ちも和んで来る。何となく前途に希望を感じる。

今年は例年にも増して春を待つ心の切なるものがある。それは殊更に寒さの厳しい冬を過したためばかりではなく、朔風吹き荒ぶ支那大陸に活躍する皇軍将兵の困難が、一日として私達の脳裡を去らなかつたからでもある。早く春になつて将兵を寒気から救つて貰ひ度い。誰も等しく感ずるあたりまへの感想のやうであるが、それだけにまた真実の普遍性があつてどうも云はずにはゐられない心理である。

解題……初出『ホーム・ライン』五巻三号、昭和十三・三・

十五 六〜七頁。本文五段組、パラルビ。時局色の濃い随筆である。目次に「〔文苑〕」欄とあり、そこには随筆である生田花世「紅藍牌」、新居好子「つれづれの記」や竹内てるよの詩「戦車と花」が併載。なお『ホーム・ライン』誌の多くは未見であり、今後調査を継続する。

エーヴ・キュリー著 キュリー夫人伝

物質にも境遇にも恵まれない一人の少女がどうして世界的・歴史的の一大科学者になつたか。

苦難の時代には、その苦難を凌いで玉成した偉人の伝記は

精神の糧となる。私は、この書を世人に奨めて時代に最必要とする堅忍不拔の力としたい。

解題……初出『セルパン』九五号、昭和十三・十二・一

広告（目次前）頁。川口篤・河盛好蔵・杉捷夫・本田喜代治共訳、白水社刊行書の広告欄に寄せた推薦文で、式場隆三郎、藤沢桓夫の文章と併載。同号には「公平」（選集『倫理御進講草案』感想集）も収録。

婦人界時評

事変下の職業女性氣質

日本全国に亘つて軍需工業が急に発達拡張し、その為め各方面で男の働き手が不足してゐます。新規に或ひは男子の欠員を補充するため重工業方面にも女性が就業しつゝ、ありますから、一般工業方面のものと合せて女性の職業戦線への動員は目覚ましい勢ひで増加しつゝ、あります。各会社や工場は若き職業女性の募集に苦心し、その与へる給料も競争的に競り上げて、かなりの額を支給してゐる向きもあります。

さて、これ等の給料や職務を若い身空の女性は如何に始末してゐるでせうか。私は先日或る平和的工業会社の人事課の人に就て景況を聴きますと、東京方面では夜業をさせるなら少しばかり余計な手当を貰つても嫌だと言つて入社を断つてしまふ。それは身体も疲れるし、第一に若い日の楽しみがなくなるといふのださうです。彼女等の多くは、とつた月給を

殆ど貯金にはしないで、洒落た服装や化粧品と映画や飲み食ひに使つてしまふさうです。

ところが阪神方面の女性では、夜業は寧ろ好むところで、その代り弁当代と夜業手当を充分請求し、取つた金の半分は貯金すると聞きました。だから阪神方面での職業女性の募集は如何なる労働条件でも容易に若い女性を得られるが、たゞ手当が不満なら入社後いつでも辞められてしまふさうです。結局、東西五分五分であるとその課長は苦笑してゐました。

この両極端の就職態度は、東西に離れて住む若い澁刺とした女性の好みが現れてゐて、寧ろほ、笑ましいくらいであります。しかし国家の非常時、男子達が遠く去つた後を護る者の覚悟として、また態度として、そこに今少し忍苦の色もあつてよいと思ひます。もつとも軍需工業方面に就業してゐられる女性たちは、その仕事の性質上、周囲の雰囲気からも余程緊張して処置してゐられると思ひますが。

情操に就て

新春に於ける家々の飾り付け、改まつた人々の装ひから挨拶、はては羽根つき歌加留多の類に至るまで、正月の仕来りのうちには女性にとつての複雑な情操教育が含まれてゐます。今年も事変下、殊に新亜細亜建設の第一年として、そこに自ら緊張した身構へのうちに、而も情操を培ふ態度と覚悟があつてもよいと思ひます。

私は、従来わが国にある「躑け」とか「嗜み」とかいふ言葉が一層意義のある奥床しい言葉と思ひますので、情操もこれ等の言葉に結びつけて考へますと、情操とは「心の躑け」「感情の嗜み」こんな風に言つたなら或は感じが出さうに思ひます。

私たちが不斷の生活の上で、ものごとを円滑に運ばせ、寂寞たることにしないのは人間の心に情味を持つてゐるからで情味は生活に対する摩擦を防ぐ油のやうなものであります。

しかし、この情味は出し方の如何によつては淫らがましくなつたり、野卑、筋違ひになつたりします。また油断をする種切れになつて冷たい家庭、潤ひのない婦人をこしらへます。よつて、内部の情味を調整することが必要であり、素直で無垢なところを運んで外界から感情や情緒を培ふものを探り入れねばなりません。物のあはれを知るといふことは日本女性の本来からの特色に数へられる淑徳でありました。現実の変遷と不如意をよく見窮め、そこに強靱にして慈しみのある情感を培つて行くことが、事変下の女性の新年に於て顧みられねばならぬものの一つであります。

年末年始の虚礼廃止

お歳暮とか年始状は、盆礼や暑中見舞以上に昔から日本人の交際儀礼となつてゐました。

これがあるために年末年始らしい雰囲気可なり醸し出さ

れるのでありました^{ママ}一年中の無音を謝して新しく交誼を復活させる機縁ともなりました。しかし、さういふ習慣も長い間には余弊を生ずるもので、お歳暮は見栄を張つて負担となつたり、贈賄して流職を惹起したり、また年賀状の乱発と義務は折角の正月を、ただその為めにのみ費消してしまつて、年頭に於ける一年の計^{はかりごと}を考へる暇もないやうな家庭も世間に可なりあるやうです^{ママ}これこそは全くの虚礼です。

殊に物資や紙の消費の節約が国策上叫ばれてゐる今日、このやうな虚礼は廃止すべきでせう。そのやうな余分の費用と暇があつたら戦地や戦傷病者のゐる病院へ送る慰問袋をこしらへるなり、慰問文を書くがよいと思ひます。その外、親しい人達が寄り集まつて年末新春の徒歩旅行に出かけるのもよいでせう。今は国民^{こぞ}挙つて同心同体、それを事新しく殆ど毎日逢つてる人や、殆ど^{かりあ}閑合ひもないやうな人に向つて、年始だけの手紙にも及びますまい。

解題……初出『婦人と修養』八巻一号、昭和十四・一・一五〇～五一頁。入谷清久氏の収集した、川崎市市民ミュージアム所蔵資料による。本文三段組、数詞を除き総ルビ。同誌は婦女界社発行、大日本婦人修養会編纂。目次には「婦人界時評（事変下の職業女性氣質其他）」とある。近衛文麿「年頭に当り銃後婦人の覚悟を促す」、生田花世「北支良民の娘達」や河井醉茗の詩「鶯の初音」等も掲載。前掲した入谷清久『岡本かの子 資料にみる愛と炎の生涯』で七巻八号、七巻九号、

七巻一〇号、七巻一二号の「婦人界時評」と併記されて紹介されていたものの、いずれも本文は省かれていた。最晩年の筆者の時局観を表わす随想だが、他篇は割愛した。

追記

『新選岡本かの子集』（新潮文庫、昭十五・六）収録の「さつきの歌」第十一～十六首は、これまで『草の実』昭和十二年六月号が初出とされてきたが、『歌壇展望』一卷二号（昭十二・五・一 一九頁）掲載の「五月の歌」六首が初出（ルビなし）であつた。

今回の資料調査では、甲南女子大学の信時哲郎氏、（株）三越 広報室資料編纂担当の塚原裕二氏より格別のご厚情を賜つた。両氏には深甚の謝意を申し述べる。

平成十八年六月二十三日 原稿受理

大阪産業大学 教養部 非常勤講師